

## 月 2 回の消防訓練が役に立つ

株式会社ホテルオークラ神戸

### 1 地震発生時の対応

#### (1) ナイトマネージャーの対応

地震当時ホテルには240名(外国人19名)が宿泊していた。また、ナイトマネージャーをはじめとして、従業員56名が勤務していた。当日、ナイトマネージャーは午前5時30分に起床し、2階(メザニン階)を巡回していた時に地震に遭遇した。ちょうどその時、エキスパンション部の廊下を歩いていたために揺れが激しく、立ってられない状態でその場にかがみこんだ。周囲は粉塵のため視界は数メートル程度しかなかった。

地震の揺れがおさまるのを待ってロビー階(3階)に駆け上がった。ロビー階は天井部分が一部落下しスプリンクラーヘッドが脱落していた。停電後、数秒で自家発電に切り替わり照明が点灯していたために避難には支障がなかった。

ナイトマネージャーとベルボーイはロビー階で合流し、1フロアを1~2名ずつで分担し、約10名で館内の宿泊客を避難させるために巡回を開始した。客の中には自分でロビー階にすでに避難した宿泊客もいたが、両名はマスターキーを持って全室を開けて確認して回った。

地震により3か所ほどドアが開かないところがあったが、ドア越しに「バルコニーにまわるから待っていて下さい。」と落ちつかせて避難させた。念のために再度各客室を点検して回ったため、最終確認に約1時間ほどかかった。

各室のテレビ、家具等が転倒、落下していたが、幸いに負傷者はいなかった。避難に関して宿泊客は比較的整然と行動しておりパニック状態にはならなかった。

#### (2) 警備員の対応

1階の防災センターには8名の警備員が勤務しており、他の3名が巡回中であった。そのうち4階屋上を巡回中に地震に遭遇した警備員は、最初の揺れは小さく感じていたが、間もなく「ドスン!」という衝撃があり、思わず近くの配水管にしがみついた。その時、高層棟の揺れや近くの高速度道路の橋桁の落下する音を確認している。

揺れがおさまって、防災センターへトランシーバーで連絡を取ったが不通であった。さらに南西階段から1階へ戻ったが、視界は粉塵等により5~6mしかなかった。また、地盤は50センチ程度陥没していた。防災センターでは、防排煙施設等が地震の衝撃による作動により複数の警報が鳴動していた。自動火災報知設備に「32階~火災」の表示があり動揺した。警備員が現場を確認するために32階まで階段を駆け上がったが、確認までに約30分要した。防災センターでは、駆けつけた警備員から非常電話により「32階異常なし」の連絡を受けた。

#### (3) 非常連絡の状況

地震発生から間もなく、部課長に対し一斉非常召集（エンドレステープ式）を交換台からオペレーターが行った。激震地域は無応答もあったが、社員の情報連絡に役立った。役員の一人は、地震後すぐにホテルへ連絡を取り、宿泊客への安全の指示と状況の把握をした。同じく午前7時頃東京本社から状況確認の電話が入った。その後、各セクションの責任者をはじめとする社員が自発的に参集し、午後3時頃には150名ほどの社員が勤務体制に編入され対応した。

## 2 避難誘導後の状況

宿泊客の半数は当日のうちに帰宅し、残った宿泊客は余震を考慮し低層階に集め宿泊させたが、そのうち約20名は不安感があるためにロビーで仮眠した。従業員はロビーに集まった宿泊客に毛布を配布し、朝食用としてビスケット、ジュースなどを提供した。当初、情報はラジオをロビーに置き収集した。余震対策として屋外プールの水を消火用水として確保しておいた。

## 3 教訓

- (1) 避難誘導がスムーズに出来たのは、月2回定期的に行っている消防訓練の成果であった。
- (2) 防災センターでは、自動火災報知設備の誤作動等の様々な警報音に気を取られ、非常放送を適切にできなかった。この課題は各事業所共通のものと推測できる。例えば、震度5以上の地震発生時には地震計と連動し、強制的に非常放送するように工夫するなど今後は地震時の非常放送体制について検討が必要である。
- (3) ドアが開かずに出られなくなった部屋があったが、バルコニーが大変役立った。
- (4) 東京では食料の備蓄指導があるとのことである。今後、神戸市でも検討していく必要がある。
- (5) ホテルでは、地震の激しさを物語る損傷した配管を社長の指示で保管していた。今後、防災博物館の設置を検討していくうえで、現段階からの資料保存が必要である。

神戸市民を激励するため、神戸ポートタワー、神戸海洋博物館とともにホテルの客室の照明を点灯し、「復興の光のエール」が送られた。

（2月21日～28日）

